

「子どもの豊かな創造性を育成するための造形活動」事業

幼小児が持続的に参加できる教室を開催して
子どもの豊かな成長を育む造形活動を推進する

2013年に都内の幼・小の美術担当教師有志が立ち上げた「東京都幼小児造形教育研究会」は、会長の辻 政博さん(前東京都図画工作研究会会長)を中心に、子どもの成長を育む造形活動の研究と実践に取り組んでいる。発足以来実施してきた幼児と小学生が親子で参加できる造形教室を本年度も継続し、子どもの個性と感性を大切にした指導を行う。教室は表現する喜びにあふれている。

廃校になった小学校の図工室を利用して
子どもの主体性を尊重した造形活動を実践

子どもにとって、つくったり描いたりすることは自分を表現すること。それは世界に働きかける最初の主体的な経験となる。したがって、幼少期から造形活動に携わることは、子どもが豊かな創造性と社会性を育むうえでとても大事なことだ。そのためにも、乳幼児から、一時的なイベントではなく、年間を通して継続的に活動に参加できる場が必要であるとして、本活動はスタートした。本年度も昨年から継続して、幼児と小学生を対象にした次の3つの造形教室を開いている。

乳幼児の造形教育を実践する活動「えのぐなないろ」

は、2歳前後からの未就園児が母親と共同で造形活動を楽しむ教室。子どもたちは初めての絵の具や粘土との出会いを経験し、床一面にマットが敷かれた教室で、汚すことを気にせずにダイナミックに触れ合うことができる。小学生から親子で参加できる「親子陶芸教室」では、親子が互いに土に触れながら対話し、焼き物づくりに挑戦する。「こども図工室」は、低学年から高学年までの小学生が共同して、テーマに応じて紙や木、プラスチックなどの材料と教室の中にある道具を自由に使ってものづくりの楽しさを体験する教室だ。

実施にあたっては、NPO法人「市民の芸術活動推進委員会(CCAA)」とタイアップして、廃校になった四谷第四小学校の図工室を利用している。教室はいずれも月に2回、年間を通して開催され、焼成窯などの設備や講師やアシスタントの充実を図るためにAJOSCの助成が役立てられた。

小学校図画工作専科教員歴38年、CCAA理事長で「こども図工室」の講師を務める鈴木弘之さんは、本活動が推進する造形教育について次のように語る。

「最近では幼児を対象に英才教育を行う絵画教室などができているようですが、結果を求めるだけの教育には疑問

を感じます。本当の教育とは、大人の理論や技法を教え込むことではなく、もっと自然に子どもの持っている可能性を引き出すこと。そのためには、子どもが自分で感じて工夫していくことが大事なのです。ですから教室では、基本的な技術が必要な場合には指導しますが、決して子どものすることに手出しはしません。子どもの主体性を尊重しながら、あくまでも物づくりの楽しさへと導いていくことが指導者の役割だと思っています」

ものづくりに子どもも大人も熱中
活動を通じて親子が触れ合う教室

教室のひとつ、毎月日曜日に開講する「親子陶芸教室」をたずねてみた。この日は30名以上の小学生の親子が参加し、図工室はほぼ満席。前回つくった正月飾りの絵付けと釉薬をかける作業に、子どもも大人も夢中で没頭している。そんななか時折、覗き合ったり、そっと手を添えたり、楽しげに言葉を交わしたり。親と一緒にいることで子どもたちが安心して、のびのびと活動しているのが印象的だ。一方、久しぶりのものづくりに親の方が夢中になっている光景も。教室には、単発のワークショップにありがちな時間内に仕上げられまいけないという焦りや緊張感はなく、自由でゆったりとした時間が流れていた。

講師を務める陶芸作家の畠山圭史さんは、鈴木先生の教え子でもある。いわく、「陶芸教室ではありますが、陶芸の技術を教えるのはできるだけ後にして、まず親子が作りたいものを作る教室にすることを第一に考えています。また、教室ではなるべく威圧感を与えないように、皆さんの間を巡回しながら呼ばれたら応じるというようにして、

担当者より



教室運営の
大きな助けに
なりました

東京都幼小児造形教育研究会
事務局長
大澤常明さん

教室に来る子どもたちは、本当に自由にいきいきとものづくりを楽しんでいます。教室の運営は大変ですが、安い参加料で続けてこられたのも、助成していただけたおかげです。現在は主に口コミで多くの親御さんに来ていただいておりますが、今後は教室の周知・募集のための広報活動にも力を入れていきたいと思っています。

子どもが中心になって活動できる場づくりを心掛けています」。そんな教え子の教室の様子を見守っていた鈴木さんも、「親子で一緒になって同じことに熱中する姿はとても素敵じゃないですか。造形に言葉は要らないですね。活動を介してお互いの気持ちが通じてしまうんです」と目を細める。

今やアニメ『ドラえもん』に出てくるような子どもたちが遊べる空き地は少なく、遊びの主役は仮想空間で遊ぶテレビゲームだ。子どもが自分の身体を使っているいろいろなものに触れ、感じ、考えながら、創造力を育んでいく時間や場所は失われつつある。しかし図工室で無心に粘土をこね、いきいきと絵筆を走らせている子どもたちの姿を見ると、子どもは本質的に造形活動が好きなのだということがよくわかる。こういう機会を確保するのも大人の責務だろう。



小学生の親子が参加する「親子陶芸教室」



大人も子どもも絵付けの作業に夢中



2歳前後の乳幼児が母親と一緒に絵の具と触れあう